

C-18 フランスの服装造形に見る美意識について 一ロココを中心として一  
大分大教育 釘宮久美

目的 精神と肉体の調和を求めて人間は永遠に流浪してゐる。その中で欲望と虚栄は悪魔の如く人間を翻弄する。時にはそれに溺れ、時には抵抗を試み、新たな歴史が作り出されてきた。服飾に何を語らせ得るか、歴史上にその可能性の拡大を探索するのが目的である。

方法 旅伴により現地で得た凡土人情を身にしみて、パリ・カルナヴァレ美術館所蔵の美術観察と、合せて同館発行の18世紀服飾展示会報告書を参考にして、分析をこころみぬ。

結果 ゴシック期にフランス的性情の芽生えを見た服飾は、ルネサンス、17世紀を経て、この18世紀には「洗練・完成」という結実があつた。ロココの衰代を三期に分けることができる。夏表ワトーの「ジェルサンの看板」に見られる *robe à la plis watteau* は競争的美態が見られる。カルナヴァレ美術館所蔵の *grande robe à la française* を始め夏表ブーシェの描いた、ポンパドゥール夫人の肖像等には、シルエットの安定感、装飾の統一性、造形の軽妙感が見られ、それはロココ造形の完成の域を提示してゐる。モローの銅版画に見る *robe à la polonaise* の次々に軽装になつてゆく形に18世紀後期のあわただしい世情が伺われる。人為の限りを尽し、洗練することによつて理想に到達せんとした願望が、その頂上に達した時、一方で、素朴な自然に帰るということから人間の幸福を見直そうとする思想が起り、爛熟してゐた時代に必然的な轉換期が訪れた。但人意識から社会意識にめぐめて、自由、平等、博爱の思想を育んだ環境に、婦人達を中心とするサロン生活があつたことを見のがすことはできなからぬ。その場で一役を荷負つたのが服飾であつたこともフランス的性情であつたといへよう。